

# 『源氏物語』宇治の大君を巡る女房の再検討

## ——橋姫三帖の語り——

星野佳之

### はじめに

次の1は、大君の許への薫の再侵入について弁の御許と老女房達が算段する場面である。

1 客人は、かく顕証にこれかれにも口入れさせず、忍びやかに、いつありけむこともなくもてなしてこそと思ひそめたまひけることなれば、「御心ゆるしたまはずは、いつもいつもかくて過ぐさむ」と思したまふを、①この老人の、おのがじし語らひて、顕証にささめき、さは言へど、深からぬけに、老いひがめるにや、②いとほしくぞ見ゆる。(総角・247)<sup>注1</sup>

①「この老人の」以下に対する諸註大方の理解は、玉上評釈の「この老女が、自分たちで相談して、あからさまに話し合つて、何といつても、あさはかなので、老年でねじけているからか、お気の毒に見えらる。」という解釈を踏まえていて、集成、新全集等も同様に理解する。弁を弾じて大君に同情する草子地というわけである。これは岷江入楚

の「私 弁君は用意ありけにかけりされとも此事にはかくかけり仍さはいへと老ひかめるといふなり」という解釈の流れを汲むもので、①の「さはいへど」を、「以前は思慮深かつた、(さはいへど)今は浅慮となつて」と理解するのである。しかし、集成も採用する「何といつても」という無理のある訳語はもとより、「弁は思慮深かつたのに」と読むのは、「さ」の指示対象を茫漠とした文脈に求めたもので随分と据りが悪い。本稿はまずこの解釈の再検討から始め、この場面の理解の修正から、物語の語られ方の一端が窺えることにも論を及ぼしたい。

### 一

例1についてより穏当と思われる解釈が既にある。旧体系の「(そう(好意的に顕証になど考える)とは言うけれども、思慮の深くないせいであろうか、老いて、偏つた考であろうか、(その処置は違っているの)で)どうも、気の毒に思われる。」(丸括弧内も原文)というもので、これだと「さ」が直前の「顕証にささめき」に無難に対応するし、「老

人達は顯証に相談などする、(さはいへど)老の為かその内容は穩便にという薫の意図に反して『不弁』(注2)で:「と対立項も明瞭である。これは孟津抄の「随分穩便にとしたれども老人どもにて不弁にしないたるはいとおしきと薫の心也」(「このおひ人をのかし、」に対する注)という理解に通うものだが(注3)、この注は①のみならず②「いとほしくぞ見ゆる」についても、「薫の心也」と述べていて示唆的である。諸註が「姫君にお気の毒」との草子地ととのに対立するものだが、実は大君に対して語り手が諸註の言うような直接的な同情を述べた例は他にない。例えばこの例の直前の、

2 「例の色の御衣ども、奉りかへよ」など、そののかしきこえつつ、みなさる心すべかめる気色を、あさましく、げに何の障りどころかはあらむ、ほどもなくて、かかる御住まひのかひなき、山なしの花ぞのがれむ方なかりける。(総角・24)

の如く、容易に読者が姫君に同情を寄せ得る語りが為されるのだから、「のがれむ方なければいとほしや」とでもいった草子地も簡単なはずが、それがないのである。例1の「いとほしく…」を草子地ととる事にも慎重になるべきで、孟津抄の指摘は検討に値する。

孟津抄が「薫の心也」というのは、「いとほしくぞ見ゆる」を次のような例と同列に解するものであろう。

3 …と、(天君)ほのかにうち笑ひたまへるけはひなど、(薫)あやしうなつかしくおぼゆ。(総角・289)

4 (匂)御心の中を知りたまはねば、女方には、またいかならむ、人

笑へにやと思ひ嘆きたまへば、げに心づくしに苦しげなるわざかなと見ゆ。(同・同)

5 「…」など、人の御上をさへあつかふも、(薫)かつはあやしくおぼゆ。(同・307)

いずれも薫または匂宮の心内が、「おぼゆ/見ゆ」の形で、半ば地の文として記されるものだが、例1「いとほしくぞ見ゆる」も同様に解した方が分かり易い。「いとほしくぞ見たまふ」と言えるところを一步薫の心内に寄った為に「見ゆる」という文体になる訳で、「いとほしく」感じたのは語り手ではなく薫ととるのである。そしてこの「いとほし」は相手を気の毒がるのではなく、自分が迷惑を感じる方の用法であろう(旧大系は「気の毒」というからこの部分は薫の心内ととらないのかも知れない)。

まとめれば本稿は1を、「この老人達は自分達で相談して、あから様に話し合つて、とは言つても浅はかだ年のせいなのか、(自分に)迷惑な感じだ」という薫の心内に融合していく文体と解すべきだと考えるのである。旧大系の後は長く顧みられなかった解だが、語法の上から最も無理がなく、更には1を、自分の利益となる行動をとる女房達であつても冷ややかに眺める薫の様と捉え直すことにもなり、後の匂宮が中君侵入の際の「このさかしたつめる人(弁)や、語らはれたまつりぬらむ」(総角・265)という彼の言葉等と同質のものを見出すことに繋がる。

いつまでも待つと言うから女房が謀議を半ば公然と行つが、それは

自分にとって迷惑だ、などと感じているこの薫の姿を、玉上評釈は「女房たちが騒ぎ立てるのは、薫の望むところでもなかったという。姫宮への気がね、思いやりもあろうし、薫自身、はしたなくもあろう。そして読者の思わくもある。」と薫の思うまま素直に受け止める。しかし、後に弁の説得が不調に終わると聞くや躊躇なく「たばかれ」となるのだから(例6)、1は正に、薫自身が真先にあざむかれていたと吉岡(一九六五)が説く「自己の擬態」であって、「薫自身がかくありと考えてそのようにふるまい、世間もそれを公認する薫と、作者その人がかくありと考える薫」の内の、前者であるに過ぎない。

6 「さらば、物越しなどにも、今はあるまじきことに思しなるにこそはあなれ。今宵ばかり、大殿籠らむあたりにも、忍びてたばかれ」とのたまへば、心して人とくしづめなど、心知れるどちは思ひかまふ。(総角・251)

こうして本稿は1を従来大方の説と大きく異なって解釈するのだが、この理解は弁と薫の描かれ方にも再検討の必要を生じさせることになる。これについて節を改めて考えることとしたい。

## 二

まず弁の描かれ方について。弁については「人柄の変化」を言われる事が多い。新全集の次の解説はその典型である。

弁の応答は、薫と大君とそれぞれの心をくみ、情理を尽し、聡明・

慎重な人柄を印象づける。しかし、それも年の功ゆえの駆引きもあるうか。後の弁の変わりざまに注意。(総角・231頭注、後掲例12を含む部分に対するもの)

例1の従来解釈では、正に「弁の変りざま」を語り手自らが述べて大君に同情しているのだから、弁の造型の把握自体にも大きく影響してきたと思われる。しかし前節の如く捉え直した場合、少なくとも語り手が弁を直接に指弾する例ではなくなる。迷惑を感じるのは薫であり、その迷惑の原因である「老人」とは、「おのがじ、語ら」ふという以上複数の老女房達である。弁はここではその一部であって老人一般の中に見れば埋没しているのである。この「埋没」は、他の場面でも弁に見られる在り方である。例えば7の、大君の思考が全く理解できず、神憑りかその奇異な生立ちのせいかとあから様に醜く談ずる女房達の中に、弁がいるのかどうかは文脈上明らかでない。

7 「おほかた、例の、見たてまつるに皺のぶる心地して、めでたくあはれに見まほしき御容貌ありさまを、などていとめて離れては聞こえたまふらむ。何か、これは世の人の言ふめる恐ろしき神ぞつきたてまつりたらむ」とは、菌うちすきて愛敬なげに言ひなす女あり。また、「あな、まがまがし。なぞの物かつかせたまはむ。ただ、人に遠くて生ひ出でさせたまふめれば、かかることにも、つきづきしげにもてなしきこえたまふ人もなくおはしますに、はしたなく思さるるにこそ。いま、おのづから見たてまつり馴れたまひなば、思ひきこえたまひてん」など語らひて、「とくうちとけて、思ふやうにてお

はしまさなむ」と言ふ言ふ寝入りて、いびきなどかたはらいたくするもあり。(総角・254)

他方弁の言動・思考である事が明かな場面では、老人一般とは対照的に、大君の必死の説明を聞いて深く同情を寄せたり(例8)、姫の意を汲んで動いた事を言う(例9)のである。

8 姫宮思しわづらひて、弁が参れるにのたまふ。「：なほかうやうによろしげにを聞こえなされよ」と恥ぢらひたるものから、あるべきさまをのたまひつづければ、いとあはれと見たてまつる。(総角・247)

9 「さのみこそは、さきさきも御気色を見たまふれば、いとよく聞こえさすれど、さはえ思ひあらたままじき、兵部卿宮の御恨み深さまさるれば、またそなたさまに、いとよく後見きこえむとなむ聞こえたまふ。それも思ふやうなる御事どもなり。(略)さりとて雲霞をやは」など、すべて言多く申しつづければ：(総角・248)

しかし従来、次の10のように弁を語る場面でも、1の解釈の影響からか、彼女を否定的に捉える傾向があったように思う。

10 昔の御事は、①年ごろかく朝夕に見たてまつり馴れ、心隔つる隈なく思ひきこゆる君たちにも、②一言うち出できこゆるついでなく、忍びこめたりけれど、③中納言の君は、古人の間はず語り、みな、例のことなれば、おしなべてあはあはしうなどは言ひひろげずとも、いと恥づかしげなめる御心どもには聞きおきたまへらむかしと推しはからるるが、ねたくもいとほしくもおぼゆるにぞ：(権本・201)

ここでは、弁が①姫君たちに二心なく、②そんな姫達にも薫出生の秘密を明かした事はない事が語られていて、これを踏まえて「ところが薫は、弁の君を『間はず語りの古人』と呼ぶことによつて、誰彼となくおしやべりをする信頼のおけない人物、という偽りの弁の君像を作り上げてしまつている」(圈点原文)と捉える外山(二〇〇二)のような論もあるのだが、それは寧ろ少数で、例えば新全集などは②の「一言うち出できこゆるついで」について「弁が秘密を絶対に口外しまいと決めていたわけでもないことになる。」と注するのである。

しかしこの解は成り立つだろうか。確かに現代語の語感で「ついでがないから言わない」といえば思慮ある態度には見えまいし、中古の「ついで」にも現代語と同じく「軽いきっかけ」のような「ついで」の例(次掲参照)が見られるから、全てこの類なら新全集の解釈は自明に成立するだろう。

これは哀なる事にはあらねど、御獄のついでなり。(枕草子・あはれなるもの)<sup>(注4)</sup>

：あるじのむすめども多かりと聞きたまへて、はかなきついでに言ひよりてはべりしを：(帯木・85)

しかし次のような言わば「重いきっかけ」の例も存するのである。

二なく思ふ人(道徳)をも人目によりてとゞめをきてしかば、ゐで、離れたるついでに死ぬるたばかりをもせばやと思ふには、まづこのほだしおぼえてこひしうかなし。(蜻蛉日記・天禄元年七月)

宮も、いと弱げに泣いたたまひて、「生くべうもおぼえはべらぬを、か

くおはしまいたるついでに、尼になさせたまひてよ」と（朱雀院二 聞こ  
えたまふ。〔柏木・305〕

：「さらば、かくものしたるついでに、忌むこと受けたまはむをだ  
に結縁にせむかし」とのたまはず。（同・307）

蜻蛉日記の例は人目を避けるべく道綱を残して出立せざるを得なかつた事が死のまたとない機会を与えている事を言うもので、直前には鷹を放つ道綱の記事もあり、死への願望と絆しの葛藤が記される事と併せ考えれば、現代語の感覚で「ついでに死にたい」などと言うのではなからう。次掲女三宮出家の場面の「ついで」も、朱雀院の下山と宮に授戒する事との繋がりをこの父子が互いに軽く言うはずがないし、更に大君も病床で「なほかかるついでにいかで亡せなむ」と思う（絵角・323）。これらは「重いきっかけ」、言わば「絶好の機会・然るべき好機」を言うもので、要は中古の「ついで」は軽重両方に対応したものである。頻出する「はかなきついで」のような例は、それ故にその軽さを修飾語で明示したものである。中古語「ついで」のこの在り様を確認し、また例1の従来の解釈から解放された視点で見ると、当該10は「二心なく思い申し上げる姫君達にも・ついでがないから・忍びこめただけ」などと不自然な文の流れを想定してまで消極的に解釈する必要はなく、「然るべき機会」がなくて姫宮達にさえ一言も打ち明けてこなかった、という弁の猶慎重を期した態度と理解されるべきである。（こは弁を否定的に読むよりも寧ろ、証拠の品を利用するでもなく直ちに手放した彼女を信用しない薫の姿〔3〕の方に注目すべ

き場面であろう。（注50）

こんな弁と老人一般との対照は、老女房達一般が例7のように明らかに醜く描かれる一方で、弁の方は登場の場面より「けはひいたう人めきて、よしある声なれば」と地の文で肯定的に描写される事や、総角序盤の例11などから早くも際立っている。

11：例の、わろびたる女ばらなどは、かかることには憎きさかしらも言ひませて言よがりなどもすめるを、いとさはあらず、心の中には、あらまほしかるべき御事どもをと思へど……（総角・228）

更に両者のこの対照性は、薫・匂と姫君たちとの縁談に対する態度にも及び、例12で弁自身「さもあらせてまつらばや」と思っているのに姫君達の心情への理解が抑制として働く事は、老女房一般の無理解（例7）と明確な対を為している。

12 老人、はた、かばかり心細きに、あらまほしげなる御ありさまを、いと切に、さもあらせてまつらばやと思へど、いづ方も恥づかしげなる御ありさまどもなれば、思ひのままにはえ聞こえず。（総角・231）

この点で、「老若の女房は場面に応じて区別されているようにも見えるが、区別される程、實質には差違がない」「弁にしても〔中略〕他の女房と一括されて現れる場合が多く、特に個性が与えられているとはいい難い」という篠原（一九六五）に代表される従来の理解は従い難い。そもそも従来説では「弁の変化」とは「他の女房たちと同様卑俗な心情の女と化した」（新全集総角・243頭注二）事に他ならないが、

その変化が意味するものは何か、また最初から卑俗な女房と描いた場合と何が違ってくるのか、という説明は為されて来なかったように思う。少なくとも、大君の「皇女としての矜持」と対立する「世俗の利益」を弁も追求したのなら、彼女が大君の死後早麻卷で出家して中君の京移転に同行せず宇治に留まる事、即ち世俗の恩恵を存分に享受しないという「再変身」についても、解釈を与える必要があったはずだ。

本稿は、例1を含めた既述の考察に加え、次の13で大君の死の様子を「思い返して泣く弁に語り手が「ことわりなり」と理解を寄せる事も踏まえ、弁の行動が一貫して大君の利益を動機としたものであり、また語り手も一貫してその忠節を承認していると捉える事を妨げる要因は物語中に見当たらない、と考える。早麻卷の出家・宇治残留は、決して唐突なものでも再変化でもない。

13 「略」世に心憂くはべりける身の命の長さにて、かかることを見たまつれば、まづいかで先立ちきこえなむと思ひたまへ入りはべり」と言ひもやらず泣くさま、ことわりなり。(総角・316)

かかる立場からは「再変身」を説明する必要がない一方で、従来説にはない解釈上の問題を持つ事になる。それは、結局は老人一般と共に姫君達と薫・匂の婚姻を進めるにも拘わらず、弁が老人一般の「卑俗さ」「醜さ」からさりげなく遠ざけられている事の意味は何か、それと同時に対照的な老人一般に埋没する事もあるのは何故か、という問題である。

老人一般が醜く描かれる理由については、篠原(一九六五)が次のように述べる通りであろう(傍線部)。

大君が己れを持することはたいへん困難なことであつた。しかも手が全く理想的な男性であり、仏性を顕現していると評されるほどである、とするならば、この大君の闘いに現実性を与えること、いかえれば、読者の同情を得られるような形で、大君を形象することとはあるいは不可能に近いことであつたかも知れない。この困難を越えるために、大君と薫の間に女房を介在させる必要があつたと、私は考える(後略)

この間の事情を象徴的に表すのが、匂宮が新婚第三夜に宇治を訪れる場面(総角・279)である。長い場面では引用できないが、①「匂ひおはしたるも、いかがおるかにおぼえたまはむ。／正身もいささかうちなびきて思ひ知りたまふことあるべし／ましてたぐひあらじはやおぼゆ。」と中君と匂宮の幸福に場面全体が浸るところに継いで、この幸福感に水を差すような②「山里の老人どもは、まして口つき憎げにうち笑みつつ／姫宮の御心を(略)もどき口ひそみきこゆ。」という女房達の様、そしてその醜さを見た大君の③「罪ゆるされたるもなきを見わたされたまひて、姫宮、我もやうやう盛り過ぎぬる身ぞかし」という思考の確認、という流れを物語は辿る。匂宮のような世界最高の貴人が妹の夫となり、更に今一人「全く理想的な」薫が求愛しているのにそれを拒むという、「平安物語史上における画期的な」(大朝一九七六)思考が、この醜い女房の在り方(この場面では②)の「介在」

なしに受け入れられ得ただろうか。正に老人一般の表現上の役割は、大君の思考を異常と意識させずに理解させるところにある。

その彼女達が「世に知らぬ心細さ」から「世の常の住み処」を求める心情は例14で明瞭に語られる。しかしこの醜い老人達の追求する「世俗の利益」は、常識的には大君の利益でもある。

14 恨みわびて、例の人召してよろづにたまふ。世に知らぬ心細さの慰めには、この君をのみ頼みきこえたる人々なれば、思ひにかなひたまひて、世の常の住み処に移ろひなどしたまむをいとめでたかるべきことに言ひあはせて、「ただ入れたてまつらむ」と、みな語らひあはせけり。(総角・243)

例えば「世俗の道理は弁の言ひ分の方にあるとしなくてはならない」(石田一九七)事は諸家の認めるところであるし、そもそも薫は八宮が認め、その事を姫君・女房も理解していた人物である<sup>註6</sup>。八宮自身も「自分亡き後姫君はそのまま朽ち果てるのが一番だ」とは考えておらず、大君でさえ中君に対しては常識的な幸せを願うのだから、「自分の人生を決定してくれる親のいない姫君」(大朝一九七六)に対して亡父も公認の薫と結婚するよう勧める弁の原理は、大君の利益に適うはずのものであった。大君自身がそう考えず、また自分だけを世俗的結婚の対象から外す訳を誰にも納得させられない事が悲劇の要因なのであって、姫君の幸福の追求という動機と、千載一遇の好機を逃すまいと婚姻を進める弁の行為は矛盾する訳ではない。弁の立場で、薫の齋(と彼女達や八宮に見える)誠実さと世俗的利益とが大君の為に

ならぬはずはなく、大君の為に行動した者を象徴するのが弁なのである。「世俗の利益」を追求する立場は同じで、それが誰の為かという点で相違するから、弁は老人一般と対照もされ、また埋没もするのだと考えられる。大君と対立する側に彼女の、(世俗的)利益を迫及する者もいたのなら、大君が「昔物語にも、心もてやは、とあることもかかすることもあめる、うちとくまじき人の心にこそあめれ」(総角・244)と観する状況は、それほど単純で均質の要素から成るのではなかった。弁のように大君自身の幸福を求めて行動し、彼女の意向も最大限尊重しようとした者がいて猶、それが大君の思考と根本的に相違し、また彼女が死なねばならなかったからこそ悲劇なのではないか。弁と老人一般の描き別けの意味が右のように理解されるとすれば、単に「世俗的で醜悪」な老人一般だけに囲まれたのよりも、大君の孤絶は遙かに深い。

### 三

例1が弁を指弾する草子地ではないという結論は、前節の弁と老女房の再検討に繋がった。他方、草子地ではなく薫の内心の叙述だという結論からは、薫の描かれ方が考察の対象となる。その時まず着目したいのは、迷惑を感じながら女房を眺める薫の視点のままこの場面が閉じる点である。この結果「いつまでも待」<sup>註7</sup>という言葉とは裏腹に、彼が謀議を制止しなかつた事には注目させずに話が進むのであり、こ

の間の事情は曖昧に語られている事が注意される。これは次例と同様の叙述であろう。

15 ①中の宮に、天君「心地のいよいよ頼もしげなくおほゆるを、忌むことなん、いと駿ありて命延ぶること聞きしを、さやうに阿闍梨にのたまへ」と聞こえたまへば、②みな泣き騒ぎて、「いとあるまじき御事なり。かくばかり思しまどふめる中納言殿も、いかがあへなきやうに思ひきこえたまはむ」と、似げなきことに思ひて、頼もし人にも申しつがねば、口惜しう思す。(総角・324)

この場面は、「大君の最後の出家の希望も、例によって今後の保身に懸命の女房たちの手で簡単に握りつぶされ、大君は死に向かつて最後まで孤独な歩みを進めるほかない。」(新全集)、「女房連中がどうして賛成しよう。(略)女房は目前の利を考えて、姫宮の遠きおもんばかりなどわかりはしない。」(玉上評釈)と理解されているのだが、訴えられた中君から焦点がいつの間にか女房に移っている事にも注意する必要がある。女房の阻止といつて間違ではないが、中君当人も姉の願いを叶えたわけではない。いわば中君を出家阻止の当事者から外す語り手段である。

これと同じように例1でも薫の謀議への関わりを語る事が回避されていた訳だが、実は少なくともいわゆる橋姫三帖の辺りでは、総じて語り手は彼に対する言及に慎重である。例えば橋姫三帖でも薫の美しさが言及される事は何度かあるが、それは16・17の如く若い女房達によるのである。

16 本意をも逃げばと契りきこえしと思ひ出でて、「立ち寄りむ蔭とたのみし権が本むなしき床になりけるかな」とて、柱に寄りゐたまへるをも、若き人々はのぞきてめでたてまつる。(権本・212)

17 人々近く呼び出でたまひて、物語などせさせたまふけはひなどの、いとあらまほしく、のどやかに心深きを見たてまつる人々、①若きは、心にしめてめでたしと思ひたてまつる、②老いたるは、ただ口惜しういみじきことを、いとど思ふ。(総角・333)

16や17の①の如き、大君の悲劇とは無関係なように単純に明るく薫を礼賛する若い女房達の在り方は、特に17で①②が対置されている事に象徴的なように、老女房の描かれ方とは一線を画す。これはただ登場人物としての性格の違いという以上に、語りの一手段として注目されるものである。というのも薫以外の人物については、語り手も普通に誉める事を厭わないからである。以下そのことを確認していくと、まず姫君達は当然、18・19(また後掲の26)のように礼賛されている。

18 月ごろ黒くならはしたまへる御姿、薄鈍にて、いとなまめかしくて、中の宮はげにいと盛りにて、うつくしげなるにほひまさりたまへり。天君御髪などすましつくろはせて見たまつりたまふに、世のもの思ひ忘るる心地して、めでたければ、…(総角・242)

19 「三日に当る夜、餅なむまるる」と人々の聞こゆれば、ことさらにさるべき祝ひのことにこそはと思して、御前にてせさせたまふもたどたどしく、かつは大人になりておきてたまふも、人の見るらむこと憚られて、面うち赤めておはするさま、いとをかしげなり。こ



のかみ心にや、のどかに気高きものから、人のためあはれに情々しくぞおはしける。(総角・274)

18は結局大君の視線から見た中君像に流れていくが、「げに」とは語り手の同意と理解できよう。19も登場人物から見た大君の姿と見るべき要素はない。また、匂宮にも20・21の如き、他の登場人物からの賞賛に、更に語り手が同意を示す例が見られる。

20 …夜半近くなりて、荒ましき風のきほひに、いともなまめかしきよらにて、匂ひおはしたるも、いかがおろかにおほえたまはむ。正身も、いささかうちなびきて思ひ知りたまふことあるべし。(総角・279)

21 さばかり世にありがたき御ありさま容貌を、いとど、いかで人にくめられむと、好ましく艶にもてなしたまへれば、若き人の心寄せたてまつりたまはむことわりなり。(総角・313)

この列に、既述の弁の語られ方も加える事ができるだろう。これに対して、語り手が薫の美質に言及する例としては次の

22 黄昏時のいみじく心細げなるに、雨は冷やかにうちそそきて、秋はつるけしきのすごきに、うちしめり濡れたまへる匂ひどもは、世のものに似ず艶にて、うち連れたまへるを、山がつどもは、いかが心まどひもせざらむ。(総角・286)

などがあるものの、匂宮と一括された上に、姫君に関わらない山賤の心惑いを承認したところで一般的な描写以上に出るものはなからう。薫が地の文で単独に礼賛されるのは、実は次の23の②「いとなまめか

しうきよげなり」くらいしかないのだが、

23 七日七日のことども、いと尊くせさせたまひつつ、おろかならず孝じたまへど、限りあれば、御衣の色の変らぬを、①かの御方の心寄せわきたりし人々の、いと黒く着かへたるをほの見たまふも、

くれなゐに落つる涙もかひなきはかたみの色をそめぬなりけり  
聴色の氷とけぬかと思ゆるを、いとど濡らしそへつつながめたまふ  
さま、②いとなまめかしうきよげなり。③人々のぞきつつ見たてまつりて、「言ふかひなき御事をばさるものにて、この殿のかくならひたてまつりて、今はとよそに思ひきこえむこそ、あたらしく口惜しけれ。(略)」と泣きあへり。(総角・331)

これとて女房の描写から入り(①)女房の視線に移る(③)以上、彼女達の見た薫像かも知れぬ。

つまり語り手は薫に対してだけ、沈黙しているのである。薫が物語の主人公にふさわしく、但し挙例の通り表面的な美質に限って礼賛される時、この特に難しくもなさそうな役目は若い女房のもので、語り手は関与しない(注7)。若い女房達は、語り手の沈黙を補完するように薫を礼賛するのである。

これらの例とい例1といい、語り手は薫への言及に相当意を用いていると言えよう。そしていずれも、美質と謀議とで語られる内容に違いはあっても、語り手が若い女房の言葉や薫本人の内心の背後に身を隠して薫に直接言及しない点では同じ質のものである。そうまでして薫について口の重い語り手が、珍しく彼に直接投げかける言葉とは

どのようなものか。

24 中納言は、三条宮造りはてて、さるべきさまにて渡したてまつらむと思す。げに、ただ人は心やすかりけり。(総角・290)

25 半なる偈教へむ鬼もがな、ことつけて身も投げむと思すぞ、心きたなき聖心なりける。(総角・333)

24の何でもないような挿擧が一つ、そして残り一つは25の、表面上はどうあれ、橋姫三帖を貫いて夢浮橋の大尾まで届くような、辛辣な皮肉なのである。薫に対し寡黙な内に皮肉を練り出す語り手のこの在り方は、当然この後の彼の描かれ方と深く関わるだろう。薫像の考察自体は既に本稿の域を出るが、「薫論が多く薫批判に傾きがち」(後藤一九七五)な事への警戒があることを理解しつつも、「作者自身の薫観は薫に対してそれほど肯定的だろうか」(吉岡一九七二)という問を改めて想起するものである。

## おわりに

例1の再検討から、弁と老人一般の描き別け、そして薫の語り方と、二つの方向に問題は展開したのだが、その過程で女房の三者(弁・老人一般・若い女房)それぞれの役割を見出す事となった。前二者の対照は大君という一登場人物の思考と対置され、後者は語り手と表裏する等、機能する次元も区々であるが、両者共に薫への言及を避ける語り手の隠れ蓑になる事がある。

こうして多様に語り方が使い分けられる中、語り手は死に往く大君に対しては最大の賛辞を贈った。

26 夕暮の空のけしきいとすごくしぐれて、木の下吹き払ふ風の音など、たとへん方なく、来し方行く先思ひつづけられて、添ひ臥したまへるさまあてに限りなく見えたまふ。白き御衣に、髪は梳ることもしたまはでほど経ぬれど、迷ふ筋なくうちやられて、日ごろにすこし青みたまへるしも、なまめかしさまさりて、ながめ出だしたまへるまみ額つきのほども、見知らん人に見せまほし。(総角・三一)

当然ながら彼女をこそ美しく語ったのだった。彼女の悲劇が美しく、正しく悲劇として理解されるよう、当時に於いて碎いた苦心の一つに、如上の語り方の多様さがあつたように思われる。もはや大君を巡る女房を一括して捉えたり、醜いという一面のみを強調して指弾するよりも、物語が世俗の道理と相剋するが如くに駆使した語り的手法として見直す必要があるだろう。

注1 掲載の本文は以下に拠った。源氏物語・大和物語；新全集(源氏物語引用例の巻名の後の数字は新全集の頁数。) 蜻蛉日記；枕

草子；新大系

2 「弁はず。知識であれ、宝物、家財の何であれ、それが不足し欠乏していること。」(日葡辞書)

3 孟津抄は同時に「さはいへとふかからぬけに老ひかめるにや」

への注として「さはいへと年老たる人は遠慮有へきにさもなく  
あさく老ひかめる心しらひなりといへり」と述べて分裂気味であ  
る。湖月抄は孟津抄の注が細流抄「さはいへどとは年老いたる人  
は遠慮のあるべきにさもなく老いひがめる心しらひなりといへ  
り」に同じと述べ、もう一方を無視するが如くである。

4 三卷本・能因本の間に異同はないが、前田本・堺本は「ついで」  
を欠く。なお「ついで」の用例は伊勢物語・大和物語・蜻蛉日  
記・宇津保物語・枕草子・源氏物語の全例を検索・検討したが、  
挙例は当然その一部のみ。

5 前掲外山(二〇〇二)参照。なお、この薫の姿勢も先に例1  
等に見た薫の「冷やかな視線」に通ずる。また例10の「ねたく  
もいとほしくもおぼゆるにぞ…」も第一節で考察した「おぼゆ・  
見ゆ」の類と同用法である。

6 大朝(一九八二)。これを含む大朝氏の一連の論考に本稿は大き  
な示唆を受けた。更に次の橋姫巻の場面から、八宮の意図は女房  
にも伝わっていたと理解される。

宮にも、かく御消息ありきなど人々聞こえさせ御覽せざすれば、  
「何かは。懸想だちて、もてないたまはんも、なかなかうたてあ  
らん。例の若人に似ぬ御心ばへなめるを、亡からむ後もなど、  
一言うちほのめかしてしかば、さやうにて心ぞとめたらむ」な  
ど<sup>153</sup>のたまひけり。(橋姫・153)

7 篠原(一九六五)に「傍観者の立場」の女房に関する指摘があ

るが、本稿の考察とは内容が大きく異なる。

〔参考文献〕

石田穰二(一九七二)「大い君の死について」『学苑』昭和四三・一

一、後『源氏物語論集』桜楓社に所収。

大朝雄二(一九七六)「宇治の女はらから論」『文学』五四・三・六、

後『源氏物語続篇の研究』桜楓社に所収。

——(一九八二)「薫と大君の物語―橋姫巻から椎本巻への展開―」

『文学』五〇・八、後『源氏物語続篇の研究』桜楓社に所収。

後藤祥子(一九七五)「薫像試論―出生・道心結婚観」『日本文学』

昭和五〇・一一、後「不義の子の視点―「橋姫」―「総角」の

薫」として『源氏物語の史的空間』東京大学出版会に所収。

篠原昭二(一九六五)「大君の周辺―源氏物語女房論―」『国語と

国文学』昭和四十年九月号

外山敦子(二〇〇二)「呼称が紡ぐ(物語)―宇治十帖「弁の君」を

基軸として―」『愛知淑徳大学論集―文学部・文学研究科編―』

第二七号、後『源氏物語の老女房』新典社に所収。

吉岡曠(一九六五)「匂宮巻における薫像」『学習院大学文学部研究

年報』一一Ⅱの十、後『源氏物語論』笠間書院に所収。

——(一九七二)「薫論」補遺『源氏物語論』笠間書院

『歌物語』伊勢物語・平中物語・大和物語総合語彙索引』西端幸

雄・木村雅則、勉誠社

『かげろふ日記総索引』佐伯梅友・伊牟田経久、風間書房

『宇津保物語本文と索引本文編・索引編』宇津保物語研究会、笠間書院

『源氏物語語彙用例総索引 自立語編』上田英代他、勉誠社

『校本枕冊子』田中重太郎校訂、古典文庫

岷江入楚『源氏物語古注集成第一四卷』中田武司編、桜楓社

孟津抄『源氏物語古注集成第六卷』野村精一編、桜楓社

湖月抄『増註源氏物語湖月抄下巻』有川武彦校訂、弘文社

『邦訳日葡辞書』土井忠生・森田武・長南実編訳、岩波書店

〔附記〕 本稿は「源氏物語を読む会」最終回（二〇〇四年一二月）での発表に基づく。この場を借りて、同会への十年にも亘る野口元大先生の御指導に感謝申し上げます。また、東京を離れて定期的な参加が叶わなくなった私に、初回の発表者であったということで最後の発表を担当させてくれた同会の参加者にも、当日の有意義な意見と併せて感謝する次第である。特に栗田岳氏には成稿中にも懇切な指摘を賜った。

（ほしの よしゆき／本学講師）